

つゆじも

斎藤茂吉

青空文庫

大正七年

大正八年

大正七年漫吟

斎藤茂吉送別歌会

大正六年十二月二十五日東京青山茂吉宅に於て

わが住める家のいらかの白霜しろしもを見ずて行かむ日近づきにけり

長崎著任後折にふれたる

うつり来しいへの畳のにほひさへ心がなしく起臥おきふしにけり

据風呂すゑふろを買ひに行きつつこよひまた買はず帰り来て寂しく眠る

東京にのこし来しをさなごの茂太しげたもおほきくなりにつらむか

かりずみのねむりは浅くさめしかば外面このもの道に雨降あめふりをるかな

聖福寺しやうふくじの鐘の音ちかしかさなれる家の藁いらかを越えつつ聞こゆ

ゆふぐれて浦上村うらかみむらをわが来ればかはず鳴くなり谷に満ちつつ

電灯にむれとべる羽蟻はありおのづから羽はねをおとして畳たたみをありく

うなじたれて道いそぎつつこよひごろ螢を買ひにゆかむとおもへり

灰いろの海うみどり鳥むれし田中たなかには朝日のひかりすがしくさせり

とほく来てひとり寂さびしむに長崎の山のたかむらに日はあたり居り

陸みちのく奥に友は死につつままたたきのひまもとどまらぬ日の光かなや

われつひに和のどに生きざらむとおもへども何なににこのごろ友つきつき
に死す

おもかげに立ちくる友を悲しめりせまき湯あみどに目をつむりつ
つ

む
 かりずみの家に起きふしをりふしの妻のほしいままをわれは寂し

うつしみはつひに悲しとおもへども^{せま}迫り来^くひとのいのちの悲しさ

むし暑き家のとのもに降る雨のひびきの^す鋭^どさわれやつかれし

長崎の石だたみ道いつしかも日のいろ強く夏さりにけり

仮^{かり}住^{ずみ}の家の二階にひとりゐるわがまちかくに蚊は飛びそめぬ

わが家の石垣いしがきに生ふる虎耳草ゆきのしたその葉かげより蚊は出でにけり
すぢ向ひの家に大工だいくの夜よしごと為事の長崎訛なごきくはさびしも

長崎歌会

大正七年十一月十一日於齋藤茂吉宅 題「夜」

はやり風かぜをおそれいましめてしぐれ来し浅夜あさよの床に一人寝にけり

大正八年雑詠

奉迎摂政宮殿下歌 長崎日日新聞所載

豊栄とよさかといや新らしくなり成れる国見くにみをせすといでましたまふ

かけまくもあやにかしこし年古ふれる長崎のうみに御艦みふねはてたまふ

百千代ももちよと祝ほぎてとどろく大砲おほづつに応こたへとよもす春の群山むらやま

み民等の祝ぎて呼ぶこゑとりよろふ港みなとあめの天にとほらざらめや

(長崎日日新聞、十首中存四首)

友に与ふ

港をよろふ山の若葉わかばに光さしあはれ静かなるこのゆく春や

長崎は石だたみ道ヴェネチアの古ふるりし小路こうぢのごととこそ聞け

おのづからきこゆる音の清すがしさよ春の山よりながれくる水

はりつめて事に従はむと思へどもあはれこのごろは痛々いたいたしかり

よわよわと幽かなりともはからひの濁りにごあらずなわれの世過よすぎに

(長崎日日新聞)

八月三十日

長崎同人小集を土橋青村宅に開く

こほろぎの鳴けるひと夜の歌がたり乱みだれたる心しましなごみぬ

長崎に来てよりあはれなる歌なきをわれにな問ひそ寂しきものを

九月二日 日ごろ独りみを寂しむ

白たへのさるすべりの花散りをりて仏ほとけの寺てらの日の光はや

中町の天主堂てんしゆだうの鐘ちかく聞き二たびの夏過ぎむとすらし

九月十日 皓台寺

ヘンドリック・ドウフの妻は長崎の婦をみなにてすなはち道だう富ふち丈やう吉きち生ちう
みき

九月十日 天主堂

浦上天主堂うらかみてんしゆだう 無元罪むげんざいサンタマリアの殿堂でんだうあるひは単純たんじゆんに御み
堂だうとぞいふ

外国よりわたり来れる靈父れいふらも「昼夜勤勞ちうやきんらう」ここにみまかりぬ

九月十二日

独逸潜航艇を観る。縣廳小使云、「潜航艇は唐人の靴のごとある」。夕べ新地の四海楼を訪ふ

長崎の港の岸に浮かばしめしドイツ潜航艇にわれ出入りつ

四海楼に陳玉ちんぎよくといふをとめ居りよくよく今日も見つつかへり

来く

九月二十五日 古賀、武藤二氏とともに猶太殿堂を訪ふ。
猶太新年なり

ユダヤきげん
猶太紀元五千六百八〇年その新年のけふに会へりき

満州よりここに来れる若者は叫びて泣くも卓にすがりて

長崎の商人としてゐる Lessner 《レスナー》 も Cohn 《コー
ン》 も耀く法服を著つ

十月二十五日

平戸行。平戸丸や旅館。小国李花に会ふ。崎方町阿蘭陀塀、阿蘭井戸、亀甲城址、亀岡神社等

阿蘭陀おらんだの商人あきびとたちは自らの生なりはひ業なりはひのためにこれを遺のこしき

あはれなる物ものがたり 語ものがたりさへありけむを人は過ぎつつよすがだになし

われは見つ肥前平戸ひぜんひらとの年ふりし神楽かぐらの舞まひを海わたり来て

十月 東京大相撲来る。釈迦嶽九州山長興山秀の山出羽嶽等に会ふ

巡業に来る出羽嶽ではがたけわが家にチャンポン食ひぬ不足ふそくもいはず

十月三十日 夜古賀十二郎氏の「長崎美術史」の講演を聞
く

南蛮絵の渡来も花粉くわふんの飛びてくる趣おもむきなしていっしかにあり

十月三十日

光源寺にて曉烏敏師の説教を聴き、のち鳴滝シイボル
ト遺跡を訪ふ

この址あとにいろいろの樹あり竹林ちくりんに冬の蠅の飛ぶ音のする

十一月六日

司馬江漢画を觀る、「天明戊申冬日於崎陽梧真寺謹写
司馬峻」

江漢かうかんが此処こゝに來りて心こめし色をし見なむ 雲中うんちゆう觀音くわんのんづ 図

十二月二十八日 渡邊與茂平と聖福寺を訪ふ

隱元いんげんの八十一歳の筆ふでといふ老いし聖ひじりの面おもしおもほゆ

十二月三十日

十一月なかば妻、茂太を伴ひて東京より来る。今夕二人と共に大浦長崎ホテルを訪ふ

四^{よんさい}歳の茂^{しげた}太をつれて大浦^{おおうら}の洋食くひに今宵^{こよひ}は来たり

はやり風はげしくなりし長崎の夜寒^{よさむ}をわが子外^とに行かしめず

寒き雨まれまれに降りはやりかぜおとろ衰へぬ長崎の年暮れむとす

大正九年

一月六日

東京より弟西洋来る。妻・茂太等と共に大浦なる長崎
ホテルにて晚餐を共にせりしが、予夜半より発熱、臥
床をつづく

はやりかぜひととせ一年おそれ過ぎ来しが吾はこや臥りて現うつつともなし

二月某日 臥床。私立孤児院は我家の向隣なり

朝な朝な正しやうしんげ信偈よむ稚をさなご児おやら親あらずにこゑこゑ楽しかり

わが病やうやく癒えて心こころに染しむ朝の経よむ稚をさなご等ならのこゑ

対たいがん岸の造ざうせんじよ船所より聞こえくる鉄てつの響ひびきは遠とほあらしのごとし

鉄を打つ音遠暴風のごとくにてこよひまた聞く夜のふくるまで

三月一日 連日勤務す

東京より来にしをさなご夕ごとに吾をむかへてこゑを挙ぐるも

五月四日 大光寺にて三浦達雄一周忌歌会を催す

長崎のしづかなるみ寺に我ぞ来し蟻が鳴けるかな外の池にて

外のもにて魚が跳ねたり時のまの魚跳ねし音寂しかりけれ

藤浪の花は長しと君はいふ夜よるの色いろいよよ深くなりつつ

君死にしよりまる一ひととせ年ねんになるといふ五月ごごわつはじめに君死にしか
も

このみ寺は山ゆゑ夜よるのしづかなる林はやしなかの中に鷺啼さぎなききにけり

山のみ寺のゆふぐれ見ればはつはつに水銀みづがねいろの港見えつも

このみ寺より目ましたに見ゆる唐寺たうでらの門もんの藁いらかも暮れゆかむとす

五月二十四日

大槻如電翁を迎へ瓊林館にて食を共にす。会者古賀十
二郎、武藤長蔵、永山時英、奥田啓市の諸氏及び予

シイボルトを中^{ちゆうしん}心とせるのみならずなほ洋^{やうがく}学^{みなもと}の源とほし

五月二十五日 ひとり西坂をゆく

西にし坂ざかを伴ばて天連れん不淨ふじやうの地ちといひて言い継ひつぎにけり悲しくもあるか

短冊二種

おもほえず長崎に来て豊ゆたけき君がこころに親したしみにけり

(永山図書館長に)

長崎のいにしふる古ふるごと明あきらむる君ぞたふときあはれたふとき

(古賀十二郎翁に)

「慶長十年にはじめて南蛮より種をつたへて長崎桜馬場に
これをうゆる」（近代世事談、金糸烟、烟草）

とせ
 ささやけきくすりぐさ薬草の一つとおもへども烟草たばこのみしよりすでに幾

武藤長蔵教授より大阪天主公教会の公教会月報を借覧
 しぬ

だいおんじだいおんじの樟くすの太樹ふときを見てかへり公こう教会けうくわいはう報ほうの歌を写すも

五月三十日 雷が丘、雨声楼（秋帆別邸）辰巳にて夕餐会
等を催す

萱くわんざう草ざうの花さくころとなりし庭なつかしみつつ吾等つどひぬ

六月一日

ひとり西坂を行く。石塔「南無妙法蓮華經安永五丙申
 歳四月廿八日」石標「天下之死刑場ノ馬込千人埋タル
 法塔様誰方モ参り被下度」長崎市東中町中島ノイ建」

長崎の麦むぎの秋あきなるくもり日にわれひとりこそこころ安やすけれ

六月二日 西浦上伊木いきりき力りきに到る

畠より烟がしろく立てる見ゆ麦刈る秋となりにけるかも

六月二十五日

六月はじめ小喀血あり、はかばかしからねば今日県立
病院に入院す。西二病棟七号室なり。菅沼教授来診

病^{やまひ}ある人いくたりかこの室^{へや}を出入^{いでい}りにけむ壁は厚しも

ゆふされば蚊のむらがりて鳴くこゑす病むしはぶきの声も聞こゆる

闇深きに蟋蟀こほろぎ鳴けり聞き居れど病やみびと人吾は心しづかにあらな

六月二十七日

血いづ。腎結核にて入院中の大久保仁男来りて予の病
を問ふ

わが心あらしの和なぎたらむがごとし寢ふしど所に居りて水飲みにけり

くらやみに向ひてわれは目を開きぬ限かぎりもあらぬものの寂しづけさ

若き友ひとり傍かたはらに来つつ居りこの友もつひに病やまひを持てり

七月二日 県立病院を退院す。三日より自宅に臥床して治療を専らにす

あらくさの繁しげれる見ればいけるがに地息ぢいきのぼりて青き香かほぞする

午ひるすぎごろわが病室の入口に鶉うづらの卵売りに来りぬ

ゆふぐれの泰山木たいざんぼくの白花しろはなはわれのなげきをおほふがごとし

七月二十二日 高谷寛日々来りてクロームカルシウムの注

射せり

わが家の狭き中庭なかにはを照らしつつかげり行く光を愛かなしみにけり

ひと坪つぼほどの中庭なかにはのせまきにもいのち闘たたかふ昆こんちゆう虫ちゆうが居り

年わかき内科医君きみは日ごと来てわが静じやうみやく脈くすりに薬入れゆく

長崎に來りて四年よとせの夏ふけむ白さるすべり咲くは未いまだか

七月二十四日 島木赤彦はるばる來りて予の病を問ふ

長崎の暑き日に君は來りたり涙しながらるわがまなこより

よしゑやしつひの命いのちと過ぎむとも友のこころを空むなしからしむな

温泉嶽療養

大正九年七月二十六日、島木赤彦、土橋青村二君と共に温泉嶽にのぼり、よろづ屋にやどる。予の病を治せむがためなり。二十七日赤彦かへる。二十八日青村かへる。

この道は山やまがひ峡ふかく入りゆけど吾われはここにて歩あゆみとどめつ

この道に立ちてぞおもふ赤彦ははや山やまご越しになりにつらむか

赤彦はいづく行くらむただひとりこの山やまみち道をおりて行きしが

草むらのかなしき花よわれ病みし生いのちやしなふ山の草むら

みちのくに稚いとけなくしてかなしみし釣鐘草つりがねさうの花を摘みたり

うつせみの命いのちを愛しみ地響ちひびきて湯いづる山にわれは来にけり

温泉うんぜんにのぼり来きたりて吾は居り常つねなきかなや雲くも 光ひかり さへ

温泉うんぜんのむらを離れてほのぐらき谿たにの中なかにて水みづの音とぞする

谿ふかくくだる道見ゆあまつ日の照ることもなき谿にかあらむ

千々ちぢわなだ和灘なだにむかひて低くいく幾つだにいき谷息づくごとし山のうねりは

高たか々だかと山のうへより目守まもるときあまくさ天草なだの灘雲とぢにけり

七月二十八日

きぞの朝友あきの行きたるこの道に日は当り居り見つつこほ恋しむ

家いでて来にしたひらに青膚あをはだの温泉うんぜん嶽だけの道見ゆるかな

小鳥らのいかに睦みてありぬべき夏青山に我はちかづく

山の根の木立くろくして静けきを家いで来つつ恋ふることあり

羊齒のしげり吾をめぐりてありしかば寒蟬ひとつ近くに鳴きつ

たまたまは咳の音きこえつつ山の深きに木こる人あり

臥処にて身を寂しめしわれに見ゆ山の背並のうねりてゆくが

あそぶごと雲のうごける夕まぐれ近やま暗く遠やま明し

夏の日の牧の高原しづまりて温泉の山暮れゆくを見たり

遠風のいまだ聞こゆる高原に夕さりくれば馬むれにけり

水光
ななめにぞなる高原に群れたる馬ぞ走ることなき

来
七月二十九日 広河原道其他、前田徳八郎、高谷寛のぼり

松かぜの音は遠くに近くにも聞こえくるころ吾は行くなり

合ねむ歡はなの花ひくく匂ひてありたるをたを手折らむとする心こころど利もなし

あまつ日は既にのぼりて向むか山やまに晚ひぐらし蝉鳴けどここには鳴かず

行きずりの道のべにして菜ぐみ菹みの実ははつかに紅あかし紅あはせ極はまらなむ

赤あかつち土の道より黒くろつち土の坂となり往くも反かへるも心にぞ留とむ

七月三十日

湯いづる山の月の光は隈なくて枕べにおきししろがねの時計を照
らす

長崎に二一年^{ふたとせ}居りて聞かざりし暁^{あかつき}がたの蝉のもろごゑ

まくらべに時計^{とけい}と手帳^{てちやう}置きたるにいまだ射^さしくるあけがたの月

起きいでて畳のうへに立ちにけりはるかに月は傾^{かたむ}きにつつ

山の上にひととき^{ひととき}に鳴くあかときの寒^{ひぐらし}蝉聞けば蟋蟀^{こほろぎ}に似たり

あかつきのさ霧に濡れてかすかなる虫むしとり捕ぐさの咲けるこのやま
 寂しさに堪ふる寢所ふしどに明暮れし吾にせまりて青き山々

七月三十日、三十一日 別所奥、林中

温泉うんぜんの別所べつしよの奥は遠く来し西洋人にしのかくにびともまじりて住めり

木こもれ日はしめれる土つちの一ところ微かすかなる虫の遊ばむとする

谿たにみづ水のながるる音も巖いはかげになりて聞きこえぬこのひと時を

牛ふたつ林のなかに来り居りきのふも此処ここに来りきたてゐしか

あまつ日はからくれなるに山に落つその麓なる海は見えぬに

露西亞ろしあよりのがれ来れる童子わらべらもはぎまの滝に水あみにけり

八月一日 一切経滝等

幾重いくへなる山のはぎまに滝のあり切きり支丹したん宗しゅうの歴史を持ちて

深き峡南かみなみひらきておち激たぎつ滝のゆくへを吾はおもひき

この山に湧きいだしたる 幾いくいづみ 泉 あひ寄り峡かひの底ちひに落おちたぎ激つ

安やすらひ息をおもひて心みだれざりふもとの山に紅あかき日ひかたむく

落つる日の夕かがやきはこの山の平たひらに居りてしばしだに見む

八月二日

あかつきはいまだ暗きにこの山にむらがりて鳴く蝸ひぐらしのこゑ

たぎり湧く湯のとどろきを聞きながらこの石原いしはらに一日ひとひすぐしぬ

温泉うんぜんが嶽たけに十日とをかこもれど我が咽のどのすがすがしからぬを一人ひとりさびしむ

水激みづたぎちけむ因縁よすがも知らずあしびきの山の奥より石原の見ゆ

ひぐらしは山の奥がに鳴き居りて近くは鳴かず日照ひてる近山ちかやま

かなかなの山ごもり鳴くは蟋蟀のあはれに似たりひとり聞くととき

八月三日 谿

けふもまた 山やま 泉いづみ なる砂のべに居をるかな病める咽のどを愛をしみて

谿のうへの樹を吹く風は強くしてわが居る石のほとりしづけし

雨はれし後の谿たに 水みづ いたいたしきのふも今日けふも 赭あかく色づき走る

この山に鴉すくなしゆふぐれて小鴉こがらす 一つ地つちにおりたつ

山かげの櫓ならの木原きはらの下枝しづえにも山蚕やまこが居りて鳥知らざらむ

大き石むらがれる谿の水のべに心しづかになりけるかも

八月三日 広河原道

わがあゆむ山の細道ほそぢに片あざみよりに薊あざみしげれば小林をばやしなすも

山なみの此処せまにあひ迫ふかだにる深谿を見おろすときに心落ちゐず

しばしして吾が立たちむか向うんぜんふ温泉めうけんの妙見たけが嶽の雲のかがやき

長崎をふりさけむとするベンチには露西亞文字など人名きざめり

多良嶽とあひむかふとき温泉の秋立つ山にころもひるがへる

吾が憩ふひとついただきに漆の木いまだ小さく人かへりみず

めぐりつつ岨をし来れば島山と天草の海ひらけたり見ゆ

なぎさには白浪の寄るところ見えこの高きより見らくしよしも

ものなべて秋にしむかふ広河原の水のほとりに馬居り走らず

山かげに今日も聞ければひぐらし晩蟬はあきこほろぎ秋蟋蟀の寂しさに似つ

やまかがし草に入りゆくひたひに足とどむ額あせの汗を拭ふきつつ吾は

八月四日 谿、温泉神社（おしめんさま四面宮、くにたま国魂神社）裏の石
原に沈黙せり

石原に来りもだ黙せばわがいのち生石のうへ過ぎし雲のかげにひとし

小さなるばったのたぐひ跳はねゆきぬみづか水涸れをりて白き石はら

曼珠沙華まんじゆしやげ咲くべくなりて石原へおり来こむ道のほとりに咲きぬ

けふひとひ一日雲のうごきのありありて石原いしはらのうへに眩暈めまひをおぼゆ

音たてて硫黄いわうふきいづるところより近き木立こだちに山蚕やまこあるなり

八月五日 広河原地、絹笠山

この山を吾あゆむとき長崎の真昼まひるの砲はうを聞きつつあはれ

絹きぬ笠がさの峰みねちかくして長崎の真昼を告ぐる砲はうの音ときこゆ

ふか山のみづうみに来てぬばたまの黒くろき牛うし等は水飲みにけり

山はらを貫つらぬきめぐる道ありて馬駈かけゆくがをりをりに見ゆ

山谿が幾重いくへの山の中なかごもり南みなの流ながれここゆ出でむか

八月六日 晚景、谿

見おろして吾居わがゐる谿の石のべに没日いりひの光ひかりさすところあり

理^{ゆゑよし}由もなきわが歩み^{たにそこ}谿底は既にくらきに水の音すも

わたつみに日は入りぬらむとおもほゆる夕^{ゆふぼえ}映とほしこころにぞ
染^しむ

くらくなりし山を流るる深^{ふかだに}谿の水^{みづ}の音^ときけば絶えざるかなや

谿底を流るるみづは今^{いま}ゆ^{のち}後くらきを流れ音^{おと}のかなしき

わたつみの方を思ひて居たりしが暮れたる途^{みち}に佇^{たたず}みにけり

闇やみ空そらに羽鳴はならして虫飛たうげびゆけり峠たうげにつかれて我あゆむとき

夕ゆふ映ばえの赤あかきを見れば凡おほよそのものとしもなし山のうへにて

八月七日 谿谷

谷たに底ぞこにくだり来こにけり独ひとり言ごとも今はいはなくまなこに眼まなこをつむる

昼ひるちかきころほひならむと四し五ご歩ほゆき山やまたに谿たにみづまなこに眼まなこをあらふ

みづ越えてなほし行くときうづたかき落葉のほひその落葉はや

谷底たにそこの石間いしまくぐりてゆく水うをすに魚住みうをすをりて見ゆるかなしき

この谿をおほへる樹々きぎのしげり葉を照らす光よもしむわれは

青々と樹々きぎの葉てらす天つ日はいま谷底の石をてらさず

かすかなる水のながれとおもへども夕さりくればその音おとさびし

石苔いしごけにわがいだ出したる唾つばのべに來りて去らぬ羽虫はむしあはれむ

この狭間はざまを強たぎき水激たぎち流れけむ石むらがりて横よこたふ見れば

苔こけあをく羊齒しだのしげれる石群いしむらを山ゆく水は常濡つねぬらしけり

石のひまくぐり流るる谷の水ききつつ吾ひとひは一日ひとひここにゐる

みなかみにのぼりてゆけば水の道落葉おちばが下したに隠かくろひにけり

石のまゆ常湧とこわきにして音たつるいづみの水をあはれ一人ひとり見つ

おのづから水ながれたる沢さはこ越えて青山見ゆるところまで来こし

しづかなる一日ひとひを経へむと山水やまみづのながるる谿に吾は来にけり

山みづのながるる音の親したしさにわれは来りて言ことさへいはず

山道をゆけばなつかし真夏まなつさへ冷つめたき谷の道はなつかし

傾きつつ太木ふときしげれるきりぎしのその下したのべの水みづひかり光見む

みづ流ながるる谷底いでて木漏日こもればひの寂しき道を帰り来るなり

八月八日 林中、谿、山

けふもまたしづかに経むと夏山の青きがなかに入りつつぞ居る

しらじらと巖間を伝ふかすかなる水をあはれと思ひ居るかも

山みづの源どころの土踏める馬の蹄のあとも好きかも

石の上吹きくる風はつめたくて石のうへにて眠りもよほす

くだり来し谷際たにあひにして一時ひとときを白くちひさき太陽たいやうを見し

八月九日 観音堂

吾が憩いこふ観音堂に楽書らくがきありWixon, Nicol, Spark等らの名よ

八月十日 谿、林

谷底を日は照らしたり谷そこにふかき落葉の朽ちし色はや

谷かげに今日も来にけり山みづのおのづからなる音をきこえつつ

魚の子はかすかなるものかものおそれしつづいづみみづ泉の水なかにゐる

妙見めうけんへ雨乞あまがひにのぼり来し人らこの谿のみづ口づけ飲めり

八月十一日

午前三時、高谷寛、大橋松平、前田徳八郎等普賢嶽に
 のぼりぬ。おのれ宿やどにのこりて、朝食あさめしのち林中やまなかを歩
 く

向^{むか}山^{やま}のむら立つ杉^{すぎ}生^ふときをりに鴉^{つれ}の連の飛びゆくところ

おのづから夏^{なつ}ふけぬらし温^{うん}泉^{ぜん}の山^{かみ}の蚕^ごも繭^{まゆ}ごもりして

八月十二日

久保（猪之吉）博士予を診察したまふ。また夫人より
菓子を贈らる

ジユネーヴのアスカナシイの業績げふせきを語りたまひて和のどに日は暮る

この山に君は来りて 昆こんちゆう 虫の卵あつむと聞くが親したしさ

わが病診やまひみたまひしかど朗ほがらにていませばか吾の心は和なぎぬ

温平ゆのひらの温泉をんせんの話もしたまひて君がねもごろ吾は忘れず

万屋よろづやに吾を訪ひまし物語ものがたるよりえ夫人ふじんは長塚ながつかたかし節ふしのこと

長崎

八月十四日、温泉嶽を発ちて長崎に帰りぬ。病いまだ癒えず。十六日抜歯、日毎に齒科医にかよふ。十九日諏訪公園逍遙。温泉嶽にのぼりし日より煙草のむことを罷めき

長崎に帰り来りてむしばめるわが齒をと除りぬいのち命をを愛しみ

暑かりし日を寢処ふしどより起き来しが向ひの山は蒼あをく暮れむとす

公園の石いしの階かいより長崎の街まちを見にけりさるすべりのはな

温泉うんぜんより吾はかへりて暑き日を齒科医に通ふ心しづかに

八月二十五日 福濟寺

のぼり来し福濟ふくさいぜんじ禪寺の石だたみそよげる小草をぐさとおのれ一人ひとりと

石のひまに生おひてかすかなる草のありわれ病みをれば心かなしゑ

長崎ひるの午たいはうの大砲中町なかまちの天主堂てんしゆだうの鐘かねこの禅寺ぜんじの鐘

福濟寺ふくさいじにわれ居り見ればくれなるに街ところどころの処々さるすべりに百日紅ひやくにちべにの
はな

八月二十六日 仰臥

ものなべて過すぎゆかむもの現身うつしみはしづかに生いきてありなむ吾われよ

みづからの此身このみよあはれしひたぐることなく終つひの日ひにも許ゆるさな

しづかなる吾の臥処ふしどにうす青き草かげろふは飛びて来にけり

八月二十七日 仰臥 二十八日 仰臥、長崎精霊ながし

精しやうりやう 霊やう をながす日来り港には人みちをれどわれは臥ふし居をり

八月二十九日 北海道なる次兄より長女富子の写真をおく
りこしければ

たらちねの母の乳房ちぶさにすがりゐる富子とみこをみれば心なは和ぎぬ

山たかく河大おほいなる国原あに生れしをさなごことほぐわれは

とほくゐて汝ながうつしゑを見るときは心をどらむほど嬉しゑ

唐津浜

八月三十日

午前八時十五分長崎発、午後一時三十五分久保田発、
午後三時十五分唐津著、木村屋旅館投宿。高谷寛共に
行きぬ

五日あまり物をいはなく鉛筆をもちて書きつつ旅行くわれは

肥前なる唐津の浜にやどりして唾おしのごとくに明暮あけくれむとす

八月三十一日 木村屋旅館滞在

海のべの唐津からつのやどりしばしばも嘯みあつる飯いひの砂すなのかなしき

潮鳴うしほなり夜もすがら聞きて目ざむれば果敢はかなきがごとしわが明日あすさ

へや

城址しろあとにのぼり来りて蹲しゃがむとき石垣にてる月のかげの明あかるさ

九月一日 為刑死靈菩提、享保二丁酉歲九月十七日

砂浜すなはまに古りて刑死けいしの墓のありいかなる深き罪となりにし

満島みちしまにわたりて遊ぶ人等ひとらゆく月に照らされ吾等われらもい往くゆく

九月三日 終日沙浜沈黙

日もすがら砂原すなはらに来て黙せりもたき海風うみかぜつよく我身わがみに吹くも

九月四日 沙浜

飯いひの中にまじれる砂すなを氣きにしつつ海辺うみべの宿やどに明暮あけくれにけり

はるかなる独りひと旅路たびちの果てにして壱岐いきの夜寒よさむに曾良そらは死しにけり

いのち
命はてしひとり旅こそ哀あはれなれ元げんろく禄の代よの曾良そらの旅路は

朝鮮に近く果てたる曾良の身の悲しきかなや独りしおもへば

あさ
朝のなぎさにまなこ眼つむりてやはらかき天あまつ光ひかりに照らされにけり

この病癒やまひえしめたまへ朝あさ日子ひこの光よ赤く照らす光よ

唐津の浜に居りつつ城しろ跡あとの年ふりし樹きを幾たびか見む

砂浜すなはまにしづまり居れば海を吹く風ひむがしになりすなはまにけるかも

孤独こどくなるものごとくに目のまへの日に照らされし砂すなに蠅居はへり

日の入りし雲をうつせる西の海はあかがねいろにかがやきにけり

九月五日 高谷寛と満島にわたる

松浦河月まつらがはあかくして人の世のかなしみさへも隠かくさふべしや

九月六日 男ひとり芸妓ふたり

隣となりに男女をとをみなの語らふをあな嫉ねたましと言ひてはならず

九月八日 沙浜

いつくしく虹にじたちにけりあはれあはれ戯たはむれのごとくおもほゆるか
も

日を継つぎてわれの病やまひをおもへれば浜のまさごも生しやうなからめや

わがまへの砂をほりつつ蜘蛛くもはこぶ蜂のおこなひ見らくしかなし

わたつみを吹きしく風はいたいたしいづべの山にふたたび入らむ

九月十日 高谷寛と来しかたあひ語りて

わが友はわが枕べにすわり居り訣れむとして涙なみだをおとす

九月十一日

午前九時五十六分唐津発、十二時半佐賀駅にて高谷寛
と訣をしむ。軌道、人力車に乗り、ゆふぐれ小城郡

古湯温泉に著きぬ

ねもごろに吾われの病やまひを看護みとりしてこの海べに幾夜か寝つる

わがためにここまで附きて離れざる君をおもへば涙しながらる

わたつみの海を離れて山がはの源みなもとのぼりわれ行かむとす

古湯温泉

九月十一日 佐賀県小城郡南山村古湯温泉扇屋に投宿、十月三日に至る

うつせみの病やまひやしなふ寂さびしさは川上川かはかみがはのみなもところ

ほとほとにぬるき温泉いでゆを浴あむるまも君が情なさけを忘れておもへや

遠雲の遠きまにまに近雲の近きまにまにかりがねはあひ呼
びわたれ羽おとさへ聞ゆるまでに

川きよき佐賀のあがたの川のべに吾はこもりて人に知らゆな

蝻かまきり螂が蜂を食くひをるいたましきはじめて見たり佐賀さがの山べに

日の光浴あみて川べの石に居り赤蜻蛉等あかあきつははやも飛びつつ

われひとりうらぶれ来れば山やま川がはの水の激たぎちも心にぞ沁む

この川の向ひの岸に白々と咲きそめたるは何の花ぞも

浅山あさやまをわれはわたりて谷水たにみづの砂ながるるを今ぞ見てゐる

杉の樹に紅きあぶらの滲しみづるををさなごの時のごとく愛かなしむ

曼珠沙華まんじゆしやげむらがり咲けりこの花の咲くべくなりて未いまだし籠こもる

山がはの石のほとりに身を寄せて日の光浴む病癒えむか

山がはの水の香にほひのする時にしみじみとして秋風ふきぬ

黄櫨はげもみぢこの山本やまもとにさやかにあわただて慌しくも秋は深まむ

いつしかに生れてうまゐたる蝗等いなごはわが行くときに逃ぐる音たつ

風ひきて一日ひとひ臥したりわが部屋のなげしわたらふ蛇くちなはひとつ

この家に急に病みたる一人ひとりありわれは手て当あてす夜半過ぎしころ

旅とほき佐賀の山べの村むらまつ祭り相撲のきほひ吾は来て見つ

(二十一日松森神社)

秋さりし山といへども蒸暑く雲のほびこり低くなり来も

(二十三日雷雨)

東京に子規忌歌会のある日ぞとおもひて吾は川^{かは}辺^{のべ}往くも

(二十六日)

やうやくに秋のふかまむ山^{やま}の峽^{かひ}朝^いの雷^{かづち}鳴りとどろけり

けふの昼^{らひ}雷^{らい}鳴りし雲そきゆきて秋の夜の月のぼらむとする

けふもまた山に入り来て樹^きの下^{もと}に銀^{ぎん}杏^{なん}ひろふ遊ぶがごとく

病みながら秋のはざまに起臥おきふしてけふも嘯みたる飯いひの石いしあはれ

此処に来て蛇へびのあまたを見たりけり常日つねひごろ蛇をおそれるしが

親しかる心になりて此里このさとのまだ金かねつかぬ栗の実を買ふ

烟草たばこやめてより日を経たりしがけふの暁あけがた烟草のむ夢ゆめ視つ

みづからの生愛いのちをしまむ日を経つつ川上かはかみがはに月照りにけり

秋づきて寂しづけき山の細川ほそかはにまきご流れてやむときなしも

みづ清き川かはかみ上かみがはに住む魚うをのエダを食をしたり昼のかれひに

胡桃くるみの実みまだやはらかき頃ころにしてわれやまひの病いは癒えゆくらむか

川のべに蜂むらがるを恐れつつ幾たび此処をとほり行きけむ

秋あきみづ水をわきて悲しとおもはねど深き狭間はざまに見るべかりけり

向山むかやまに朝ひかり差しそめしかば谷もあらはになりむかやまにけるかも

早稲わせの香かはみぎりひだりにほのかにて小城をぎのこほりの道をわれゆ
く

ゆくりなく見つつわがゐる青栗あをぐりは近き電灯に照らされゐたり

曼珠沙華咲きつづきたる川のべをわれ去りなむか病癒いえつつ

小野五平翁をのごへい九十一歳にて身まかりぬ気根きこんつめつつ長命ながいきしたり

旅ゆきつつ勝負しやうぶをしたるつよき逸話いつわこの翁おきなにはめづらしからず

送る

山口好を悼む 十月十七日大牟田浄心院追悼歌会のために

君死せりとふしらせを我は山深く狭間はざまに居りて聞けるさびしき

ありし日を思ひいでなむ世の相すがたの悲しき歌を君はうたひし

きびしかりし労働らうどうの歌うたいくつかが人の心にかがやかむかも

長崎

十月三日 朝古湯をたち午後長崎にかへる。万物に無沙汰
の感ふかし

長崎にかへり来りて友を見つ遠とほのめづらの心かなしも

校長にも会ひに行きたりおのづから低きこゑにて病やまひを語かたる

われ病みて旅に起臥おきふしありしかば諏訪すはの祭まつりにけふ逢ひにける

心しづめて部屋にし居れば衢ちまたより神の祭りの笛ふえの音ねきこゆ

わが部屋に書を重ねて旅行きしが書を持てれば手の痕つくも

十月九日 中村三郎氏と共に諏訪神社うへの丘にのぼる。
諏訪祭第二日

長崎の港見おろすこの岡に君も病めれば息づきのぼる

六枚板

十月十一日

西彼杵郡西浦上木場郷六枚板の金湯にいたる。浴泉
静養せむためなり

浦上うらかみの奥に來にけりはざまより流れ來る川をあはれに思おもひて

クルスある墓を見ながら通とほり來し浦上うらかみ道を何時かかへりみむ

日もすがら朽葉くちばの香かする湯をあみて心しづめむ自みづからのため

リユーマチス
 儂麻質斯病みをるおうな媪等にあひまじ交り日ねもす多く言ふこともなし

朝な朝な同じ頃あひにいなたみち稲田道ち兎らは走りて学校へ行く

道のべにやまかがし赤棟蛇多きをおどろきつつにしうらかみ西浦上をもとほりてく来も

山のべにひそむがごとききりしたん切支丹のまづ貧しき村もわれは見たりき

かかる墓もあはれなりけり「ドミニカ柿本スギ之墓行年九歳」

「ドナメ松下ヒサ墓行年九十二歳」
しんじや信者にて世をを終へしものな

り

信徒しんとのため宝盒抄ほうかふせうりやく略りやくといふ書物御堂みだうの中にぽつりとありぬ

小さな御堂みだうにのぼり散在する信者しんじやの家を見つつしるたり

この宿やどに島原しまばらゆ来し少女をとめ居りわがために夕べ洋灯ランプを運ぶ

油煙たつランプともして山家集さんかしぶを吾は読み居り物音ものおとたえつ

この家の主人あるじわざわざ長崎に買ひたる刺身さしみを吾に食はしむ

ここ越えてゆかば長崎の西山にしやまにいづるらむとて暫くしばらあり歩

ひらけたる谷にむかひて長崎の港のかたをおもひつつ居り

小浜

十月十五日、六枚板発。少女予の荷を負ふ。午前十時
四十分長与発、午後一時小浜著、柳川屋旅館に投ず。

学生立石源治静養に来居るに会ふ

朝なさな船の太^{ふと}笛^{ふえ}聞きしより山^{やま}峡^{かひ}のこともわきて思はず

土^ど手^てかげに二人来りて光^ひ浴^{かり}む一人はわれの教^{がく}ふる学^{せい}生

霸王^{さぼてん}樹のくれなるの花^{はな}海^{うみ}のべの光^{ひかり}をうけて気^きを発^{はつ}し居り

砂^{すな}浜^{はま}に外^{ぐわい}人^{じん}ひとりところがりて戯^{あそ}れ遊^{あそ}ぶ日本^{にほん}のをみな

塩^{しほ}はゆき温^い泉^{でゆ}を浴^ゆみてこよひ寝^ねむ病^{やま}癒^{ひえ}むとおもふたまゆら

鷗等かもめらはためらひもなく今ぞ飛ぶねた嫉ねたくしおもふ現うつしみ身われは

日本舟にほんぶねにひるがへりゐる旗見でんしやうつつその伝承でんしやうをかたみに語る

長崎もぎの茂木みなとの港みなとにかよふ船ふとぶとと汽笛きてきを吹きいだしたり

入りつ日の紅あかき光ひかりのゆらぐとき磯いそ鴨ひよどりのこゑもこそ聞きけ

日だまりにけふも来りぬ行ゆく末すゑのことをおもはば悲しからむぞ

ここに來て落日いりひを見るを常つねとせり海の落日いりひも忘れざるべし

をばま
小浜をばまなる森もり芳よし泰やす來すきわがための心こころづくしを永ながくおもはむ

うんぜん
温泉うんぜんの山やまのふもとの塩しほの湯ゆのたゆることなく吾わたしは讚たたへむ

嬉野

十月二十日 小浜発、零時二十二分彼杵著、夕べ嬉野著

旅にして彼杵そのきじんじや神社の境内けいだいに遊樂いうらくすまふ相撲見ればたのしも

いうとくゑんいなり
 祐徳院稻荷にも吾等まうでたり遠く旅来しことを語りて

嬉野の旅のやどりに中林梧竹翁の手ふるひし書よ

この山を越えて進みし大隊が演習やめて一夜湯浴みす

透きとほるいで湯の中にこもごもの思ひまつはり限りもなしも

この村の小さき社の森に来て黙すことあれど心足らはず

わが病やまひやうやく癒えぬとおもふまで嬉うれ野しのの山秋ふけむとす

長崎

十月二十六日。午前八時四十分嬉野発、十時四十三分
彼杵発、十二時半長崎著

十月二十八日 病院学校に勤務す

病院のわが部屋に来て水道のあかく出で来るを寂しみみたり

十一月一日

武藤長蔵教授より大浦天主堂に聖体降福式あることを
知らせありしかど、身をいたはりてまゐらず

けふ一日腹をいためて臥しをれば聖きまとるに行きがてなくに

十一月五日

長尾寛濟十月八日東京にて没す行年四十、東京巢鴨真性寺に葬る。寛濟は予より長ずること一歳なりき

長崎に心しづめて居るときに永遠とはの悲かなしみ聞かむと思ひきや

浅草みすぢまちの三筋町なるおもひでもうたかたの如ごとや過ぎゆく光かげの如ごとや

十一月十四日 土屋文明氏と共に春徳寺を訪ふ

黄^{わう}檠^{ぼく}の傑^{すぐ}れし僧のおもかけをきのふも偲^{おも}びけふもおもほゆ

赤く塗りし大^きき木の魚^{うを}かかりある僧等の飯^{はん}のときに打つべく

扁^{へん}額^{がく}に海^{かい}不^ふ揚^{やう}波^はの四^もつの文字^{もじ}おごそかにしも年ふりにける

シイボルト鳴滝校舎址

年々ににほふうつつの秋草につゆじも降^ふりてさびにけるかも

石垣のほとりに居れば過ぎし世のことも偲ばゆよみがへるはや

もろ人が此処に競ひて学びつるその時おもほゆ井戸をし見れば

芭蕉葉もやうやく破れて秋ふけぬと思ふばかりに物ひそかなり

洋学の東漸ここに定まりて青年の徒はなべて競ひき

柿落葉色うつくしく散りしきぬ出島人等も来て愛でけむか

鳴滝の激ちたぎの音を聞きつつぞ西洋せいやうの学がくに日々ひび目ざめけむ

興福寺、深崇寺、書画帖

深崇寺に栗崎道喜の墓を訪ふ顕耀院道喜正元居士

祭も過ぎて照らす日の光しづかなる長崎の山いろづきにけり

十一月二十一日 土屋氏長崎を発つ。夜辰巳に会合あり

くれぐれの家に石つはぶき路ふきの黄の花はわれとひととを招ぐに似たり

十一月二十二日 平福百穂画伯と浦上村をゆく

浦上うらかみの女をんなつらなり荷を運ぶそのかけごゑは此処まで聞こゆ

白く光るクロスの立てる丘のうへ人ゆくときに大きく見えつ

浦上うらかみの女等をんなの生活ことな異りて西方のくにの歎なげきもぞする

長崎の人等もなべてクロス山と名づけていまに見つつ経たりき

斜なる畠はたの上にてはたらける浦上人うらかみびと等のその鍬くはひかる

牛の背に畠はたつものをば負はしめぬ浦上人うらかみびとは世の唄うたはず

黄櫨はげもみぢこきくれなるにならむとすクロス山より吹く夕ゆふべ風かぜ

十一月二十三日 百穂画伯と長崎図書館を訪ひ南蛮史料を
看る

モリソン文庫明恵みやうゑしやうにん上人の歌集をば少しく読みて吾われものおもふ

十一月二十四日 百穂画伯と街上を行く

西^シ比^ベ列^リ亜^アよりおくりこされし俘^ふ虜^{りよ}あまた町にむらがるきのふも今日も

大浦の道のほとりにルーヴルの紙幣を売ると俘虜は佇む

チエツコへ帰らむとする捕^ほ虜^{りよ}ひとり山の石かげに自殺をしたり

寺町の墓のほとりにもかたまりてチエツコの俘虜は時を費す

親^{した}しかる友をむかへて身^みの上^{うへ}のことも語りぬ夜のふくるまで

(平福氏)

長崎より

このとし秋より冬にかけ折にふれて作りたる歌、大阪
毎日新聞、大阪朝日新聞に公にせり

真日あかく港の西に落ちゆきて今しみじみと夕映^{ゆふば}えにけり

港より太^{ふと}笛^{ふえ}鳴れるひまさへや我が足もとに蟋^{こほろ}蟀^ぎのこゑ

みち足らはざる心もちて入日さす切^{きり}支^{したん}丹^ざ坂^かをくだり来にけり

塩^{しほ}おひてひむがしの山こゆる牛まだ幾^いほども行かざるを見し

山かげの大根の畑に日もすがら光あたるを見るはさびしも

港をよろふ山の棚^{たな}畑^{はた}に人居りて今しがた昼^{ひる}飯^{いひ}を食ひたるらし

き

雨はれし港はつひに水銀みづがねのしづかなるいろに夕ぐれにけり

友二人ふたりもつひに帰りぬはりつめし心ゆるみて水を飲むなり

(土屋氏・平福氏)

支那街しなまちのきたなき家に我の食ふ黒き皮卵びんたんもかりそめならず

夏の初めより病に罹り居りしかど癒いえて白霜しらしもの降りたるを見つ

君が業務なりはひは忙いそがしからむ然れども張りつむる心を守り居らむか

長崎の港を見れば我がこころ和なごみしづまるをあやしと思ふな

セミヨノフの砲艦はうかんひとつ泊はてゐるを背向そがひにしつつ我は急いそげり

病いえてここに来りぬ目のもとの落葉のしづかさを独ゆかむか

長崎にも霜ふりにけりありふれしもののはれと我は思はず

さむき雨長崎の山にも降りそそぐ冬の最中もなかとなるにやあらむ

ものぐるひの被害妄想ひがいまうさうの心さへ悲しきかなや冬になりつつ

ウンガルの俘虜ふりよむらがりて長崎の街を歩くに赤く入日いりひす

あはれとも君は見ざらむ寺まちの高き石垣いしがきにさむき雨かな

みちのくの仙台せんたいよりおくりくれしてふ納豆なつとうを食む心しづけさ

山さん上じやうの白き十字架クルスの見えそむる浦上道うらかみみちは霜どけにけり

豆もやしと氷豆腐を買ひ来つつ汁しるつくらむと心いそげり

長崎の港の岸をあゆみみるピナテールこそあはれなりしか

うらがなしきゆふべ夕なれどもピナテールが寝所ふしどおもひて心なごまむ

十二月五日

午前武藤長蔵教授、三上知治画伯と共に大浦天主堂を
訪ひ、午後ピナテール (Pignatel) 翁を訪ふ

寝所ふしどには 括くくりまくら 枕まくら のかたはらに朱しゆの 筥はこまくら 枕まくら 置きつつあはれ

冬の雨ふるけふをしも Pignatelli 《ピナテル》 が家をたづねて身に
し染しむもの

年老いてただひとりなるピナテル寂しづかなるごとくなほも起臥おきふす

歳晚

このやまひ癒いやしたまへと山川やまかはをゆきゆきし歳としの暮となりぬる

長崎を去る日やうやく近づけば小さな論文に心をこめつ

クリスマスの長崎の御堂みだうに入ることも二たびをせむ吾ならなくに

暮れの年妻ともに身をいたはりて筑紫のくにの旅ゆかむとす

歌会

土屋文明氏歓迎歌会 十一月十七日於茂吉宅、課題「坂」

ひむがしの峠を越ゆる牛ひとつ歩みしづかなるをわれは見にけり

(西山所見)

平福百穂氏歓迎歌会 十一月二十四日於長崎県立図書館、
課題「港」

くもり日の港をいでてゆく船はかなしきかなやけむりあげつつ

大正十年

九州の旅

大正九年十二月三十日長崎発、熊本泊、翌三十一日熊

本見物を終り、同夜人吉林温泉泊。

大正十年一月一日、林温泉より鹿児島に至る。一泊

秀頼が五歳のときに書きし文字いまに残りてわれも崇たふとむ

熊本のあがたより遠く見はるかす温うんぜん泉が嶽たけは凡ただならぬやま

光よりそともになれる温泉うんぜんの山腹にして雲ぞひそめる

球磨川くまがはの岸に群れるて遊べるはこの狭間はざまに生れし子等うまぞ

みぎには冬草ふゆくさいまだ青くして朝の球磨川ゆ霧たちのぼる

青々と水綿ゆるぐ川のべにわれはおりたつ冬といへども

いちぐわついちぐわつの冬の真中もなかにくろぐると 蛸おたまじやくし 蚪はかたまるあはれ

白髪岳しらがだけ市房山いちふさもふりさけて薩摩ざかひを汽車は行くなり

おこだ
 大畑駅よりループ線となり矢嶽やたけ越すトンネル隧道の中にてくだりとなり
 ぬ

桜島は黒びかりしてそばだちぬようがん溶巖ながれしあとはおそろし

鹿児島の名所を人力車にて見てめぐり疲れてをりぬ妻と吾とは

わが友はここに居れどもあわただし使を君にやることもなし

城山にのぼり来りて劇しかりし戦のあとつぶさに聞きて去る

開聞かいもんのさやかに見ゆるこの朝け桜島のうへに雲かかりたる

大隅おほすみは山の秀ほつ国くに冬がれし山のいただき朝日さすなり

霧島は朝をすがしみおほどかに白雲かかるうごくがごとし

霧島はただに厳いつくしここにみなして南な風かぜに晴れゆきしとき

一月二、三日 夜宮崎神田橋旅館、三日宮崎神宮参拝

宮崎の神の社にまゐり来てわれうなねつく妻もろともに

冬の雨いさごに降りてひろ前にあゆめるわれの靴の音すも

ねたましくそのこゑを聞く旅商人たびあきびとは行く先々さきざきに契をむすぶちぎり

一月三日

午後三時青島あをしまにつき、広瀬旅館投宿、第五高等学校
教師ポーター（五十四歳）滞在しゐる

打寄する浪は寂しく南なる樹々ぞ生ひたるかげふかきまで

暖き洋のながれのありてこそかかる繁りとなりにつけらしも

ゆ 旅館にはポーターといふ洋人もやどりて日本の酒をのむ見

青島の木立を見ればかなしかる南の洋のしげりおもほゆ

南より流れわたれる種子たねひとつわが遠とほき代よのことしぬばしむ

かすかなる光海ひかりよりのぼりくる日向ひうがのあかつきの国のいろはや

青島あをしまに一夜ひとよやどりてひむがしのくれなる見たりわが遠とほき代よや

ひむがしは赤く染まりてわが覚むる日向の国のあかつきのいろ

わたつみの海につづける 茜あかねぞら空ふたとき 二時にしてくもりに入りぬ

一月四日 帰途につく

霧島はおごそかにして高原たかばるの木原きはらを遠をちに雲ぞうごける

灰いろのくすしき色も日あたりてこの高たか山やまは見れども飽かず

あたらしき年のはじめを旅来たびこしが高千穂の峰に添ふごとかりき

青井岳あをみだけの駅出でてより猪いのししの床の話あしを聴きつつ居たり

一月五日

久留米、「寛政五癸丑年六月二十七日、生国上州新田郡細谷村、高山彦九郎正之墓」。上野旅館にてアララギ歌会。

梅林寺を訪ふ

く^るめ^め久留米なる遍^{へん}照^{ぜう}院^{ゐん}にわれまうづ「松^し陰^{やう}以^い白^{はく}居^こ士^じ」のおくつき

神^こつ^ほ代^ほのこと恋^こし^ほみてしらぬひ筑^つ紫^{くし}のくにに果^つてし君^{きみ}はも

夜^よも^すが^ら歌^{うた}を^か語り^て飽^あか^なく^に朝^あ鷄^{さどり}が^な鳴^なく^茜さ^あす^らし

九州の十一人じふいちにんの友よりてわれと歌はげむ夜の明くるまで

梅林寺ぼいりんじに紫海禅林の扁額あり谷たにを持ちたるこの仏林ぶつりんよ

三生さんじやうけん軒居室こしつより見おろす谷まには僧一人来て松葉を掃くも

筑後川日田ひたよりくだる白き帆も見ゆるおもむきの話をぞ聞く

一月六日 太宰府、観世音寺、都府楼址、武雄温泉

観^{くわん}世^{んぜ}音^{おん}寺^じ都^と府^ふ楼^{ろう}のあとともわれ見^みたり雑^{ざつ}談^{だん}をしてもとほりなが
ら

長崎

一月三十一日

奥田氏送別会を栄家に開く。会者図書館談話会員、主
賓のほか、永見徳太郎、増田廉吉、谷田定男、林源吉、
大庭耀、水谷安嗣諸氏

くさぐさの事を思ひて尽きざるにこよひ吾等は互かたみに酔よひつ

南みなみの国はゆたけし朝あけて君を照らさむ天あまつ日ひのいろ

二月三日

奥田啓市氏鹿児島県立図書館長として出発す。予さは
りありて見おくり得ざりしことを悔ゆ

このゆふべ悔くいおもへども君とほく今し去りゆく悔くいてかへらず

二月十日 述懐

長崎の港をよろふむら山きむかに來向ふ春の光さしたり

ものぐるひはかなしきかなと思ふときそのものぐるひにも吾わかは訣かれむ

長崎に來りて既にまる三年みとせ友のいくたり忘れがたかり

きびしかりしはやり風にて見みぢか近くみの三たりはつひに過すぎにけらず
や

そがひなる山を越えゆく矢やがみ上にも思おもひのこりてわれ発たむとす

三月十四日

雪大に降、諸家に暇乞にまはる。夜茂吉送別歌会を長

崎図書館に開く

長崎をわれ去りなむとあかつきの暗くらきにさめて心さびしむ

長崎をわれ去りゆきて船ふなぶえ笛の長きこだまを人聞くらむか

白雪のみだれ降りつつ日は暮れて港の音も聞こえ来るかな

三月十五日 医学専門学校職員食堂のために一首をしたた
む

行^{ゆく}春^{はる}の港より鳴る船^{ふな}笛^{ふえ}の長きこだまをおもひ出でなむ

長崎を去り東上

三月十六日。午後十一時長崎を出発す。先輩知友多く見送らる。予長崎に居ること足掛五年、満三年三月なり。前田毅、江藤義成二君同車し、途上門司義夫君に会ふ

三月十七日

午前五時博多著、栄屋旅館。大学生青木義作、金子慎
吾二君来る。榊、久保二教授を訪問し、耳鼻科教室精
神病学教室を參觀す。夜久保博士夫妻と晚餐を共にす

もろびとに訣わかれをつげて立ちしかど夜半よ過ぎて心耐へがてなくに

春さむしとおもはぬ部屋に長崎の御堂みだうの話長塚節たかしの話

あたたかき御心みこころこもるこの室へやにあまたの猫も飼はれて遊ぶ

三月十八日

午前九時四十二分博多発、十一時四十二分小倉著、市中を見物し、ついで延命寺に行き公園を逍遙、奇兵隊墓、名物おやき餅

春こくらいまだ寒き小倉をわれは行く
 鷗外先生おもひ出して

公園の赤あかつち土のいろ
 奇兵隊きへいたい戦死せんしの墓はか延命寺の春は海潮かいてうおん音

三月十八日

午後一時小倉発、午後四時四十二分別府著、別府には
 大正八年夏一たび来りき。街見物、保養院長鳥潟博士
 訪問、博士は大学同窓也。大分共進会を見る

あたたかき海辺の街は 春しゅんぎく 菊を既に売りありく霞は遠し

鳥の音も海にしば鳴く 港みなとまち 町 湯いづる町を二たび過ぎつ

三月二十日。午後二時別府より紅丸にて出航、高浜上陸、汽車にて道後著、入湯一泊。二十一日。松山見物（人力車）、三津港より上船、多度津上陸、琴平行一

泊、神社参拝

年ふりし道だうご後のいでゆわが浴あめばまさごの中ゆ湧きくるらしも

おほうみ
大洋おほうみをわれ渡らむにこの神を齋いはひてゆかな妻もるともに

三月廿二日。琴平より高松、見物（人力車）、栗林りつりん公園、屋島。高松午後四時発、岡山午後七時著、一泊。二十三日。第六高等学校に山宮・志田二教授を訪ひ、医学専門学校に荒木（蒼太郎）教授を訪ふ。市内（人

力車）城、後楽園

この園に鶴たづはしづかに遊べればかたはらに灰はい色いろの鶴たづの子こひとつ

時もおかずここに攻せめけむ古への戦のあと波なみかがやきぬ

元もと義よしがきほひて歌をよみたりし 岡山五番町をかやまごばんちやうけふよぎりたり

三月二十三日

岡山を発してゆふぐれ神戸著、中村憲吉君出迎ふ。みつわにて神戸牛肉を食ふ。香櫨園畔の中村氏方に泊。

長女良子さん（五歳）次女厚恵さん（三歳）

ひさびさに君とあひ見てわが病癒えつることをうれしみかはす

何といふ平安やすらぎなるか朝あしたよりわがまへに友のをさなご二たり

三月廿四日。大阪。大学法医学教室（中田篤郎氏）、精神病学教室（小関光尚氏）、浪速花屋碑、心斎橋通、道頓堀（文楽人形芝居）、よる森園天涙、花田大五郎、加納曉氏等も加はり晚餐。中村氏宅泊。

三月廿五日より廿七日。中村君の案内にて奈良を見る。法隆寺佐伯管長にも会ふ。雨降る。ついで大和に行き万葉の歌に関する古跡をめぐる。ゆふ京都著。藤岡旅館に入る。

三月廿八日。宇治、鳳凰堂、平等院、宇治川花屋敷、佐久間象山遭難地、加茂川、本能寺、御所、烏丸通、堀川、嵐山電車、仁和寺の山、塔、如意輪観音、大竹

林、隱窟、臨濟宗大本山天龍寺、保津川、桂川、金閣
 寺（鹿苑院）、大極殿（平安神宮）。藤岡旅館

いそがしき君はひねもすわがために古山川ふるやまかはをみちびきやまず

あはれあはれ恋ふる心に沁しみとほり山川やまかはぞ見し君がなさけに

三月二十九日

午前十時四十分京都を発ち、米原駅下車、番場蓮華寺
 に 応和尚にあひまつる。石川隆道、樋口宗太郎二氏
 に会ふ

ぬばたまの夜よるさりくれば湯豆腐ゆどうふをかたみに食へとのたまひにけり

夜よもすがら底びえしつつありたるが曉庭あかつきはに薄氷うすらひが見ゆ

この寺に 応和尚りゆうおうをしやうよろこびて焦こがしたる湯葉ゆばをわれに食はしむ

三月三十日。米原発急行にて上京す。車中、榊、和田、小野寺の三教授にあふ。教授等は学会出席のために上京するなり。

四月一日。日本神経学会に出席し、呉秀三先生の大学教授莅職二十五年祝賀会（上野精養軒）に出席しぬ

賀歌

芳溪呉秀三先生大学教授莅職二十五年賀歌竝正抒心緒
 詞（仏足石歌体）二十五章

長崎の港をよろふ山やまなみ並なみに来むかふ春の光さしたりあまつ光ひかりは

長崎にわれ明暮あけくれてとりがなくあづまの国の君をしぬびつしぬび
 けるかな

み冬つき来むかふ春にこころこそゆらぎてやまね導みちびきたまふ情なさけし
 ぬびて

しらぬひ筑紫のはてにわれ居れどをしへの親を讃へざらめや仰が
 ざらめや

くすりし
 薬師はさはにをれどもあれの師はおほかたに似ず現し世のため
 いまよ
 今の世のため

さちはひに充ち満ちにつつあれの師の君が力はいや新しもきみが
 いのちは

ものぐるひは哀しきかなとおもふときさびしきころ君にこそ寄

れ救^{すく}ひたまはな

しきしまのやまとにしてはわが君や師のきみなれや Pinel 《ピネ
ル》 Conolly 《コノリ》 は外^{とつ}くににして

霊^{れい}枢^{すう}に狂^{きやう}といふともわがどち^{きやう}は狂^{きやう}とな云^いひそと宣^{のら}しけるらし病
むひとのため

二十^{はたとせ}年^{ねん}にあまる五^{いっ}とせになるといふみ祝^{ほぎ}のにはに差^させる光^{ひかり}や瑞^{うづ}の
みひかり

ものぐるひをまもりたまひて年を経し君がみ髭ひげはつひに白しもその清すがしさや

しろがねの髭ひげさへひかり新にひさち幸もいよよ重かさねむ君がいのちやおのづからなる

ものぐるひは悲しきもので護まもらせる君こそたふとあはれ尊たふときけふの尊たふとさや

うからやから弥いよよ々さかゆる君ゆゑに新にひさち幸もかぎり知らえず祝いははざらめや

長崎に来てより三とせは過ぎにけりいざ帰りなむあづまの春へ君
がみもとへ

なまけつつ十年ととせを経たりおこたりて十歳ととせ過ぎけむことをしおもふ
君を祝ほぎつつ

中ちゆうがく学がくの四級生しきふせいにてありけむか精神せいしん啓微けいびをわれは買かひにき
小川をがはまちにて

もろもろのくるへる人のあはれなるすがたを見つつ君をおもはむ

敬うやまひまつり

わがもてるものは貧まづしとおもへども 狂きやうじん 人も守りてこの世は経へな
むありのまにまに

をしへを受けしもろもろの人あつまりて教への親を囲むけふかも
言ことほ壽ぎにつつ

うつしみの狂くるへるひとの哀かなしさをかへりみもせぬ世の人醒さめよも
ろびと覚さめよ

君がこころひろく寛ゆたけくたまかづら絶ゆることなく幸さいちはへてあら
む若わかえつつあらむ

おなじ世にうまれあひたる嬉うれしさや教へのおやにこの敬うやまひをささ
げまつらむ

むらぎものこころ傾かたけことほぎの吉言よごとまうさむ酒さかほぎ祝いわもせよ豊酒とよき
清酒きよきに

あまつ日の光るがごとく月つくよみ読よの照らすがごとく常幸福とこさいはひにいま
す君かも

帰京

大正六年十二月長崎に赴任してより満三年三月余、足掛五年になりて大正十年三月帰京しぬ

東京に帰りきたりて人ごろしの新聞記事こそかなしかりけれ

閨けいちゆう中ちゆうの秘語ひごを心平たひらかに聞くごとし町の夜なかに蛙鳴かはづきたり

長崎よりかへりてみれば銀座十字つむじに牛は通らずなりにけるかも

さみだれの日けならば降れば市いちに住む我が腎じんははや衰へにけり

流行の心理は模倣もほう憑ひよう依いの概念がいねんを以て律りつすべからず夏の都会とくわい
に

ゆたかなる春日はるびかがよふ 狂きやう院ゐんに 葦原金次郎あしはらきんじらう つひに老いたり

さみだれはしぶきて降り殺さつじん人の心きざさむ人をぞおもふ

わが心いまだ落ちるぬにくれなるの胡頹子ぐみを商あきなふ夏さりにけり

われ銀座ぎんざをもとほり居りてブルドック連れし女をんなにとほりすがへり

長崎の昼しづかなる唐寺たうでらやおもひいづれば白しろきさるすべりの

な

朝はやき日ひ比谷ひやの園そのに腫むくみたる足をぞ撫さする労働はたらきびひとり

馬に乗りて行く人のあり日がへりに玉川あたり迄行くにやあらむ

浅草やぎふしの八木節やぎふしさへや悲しくて都ももかに百日あけくれにけり

ものぐるひを看護かんごして面おもはればれとしてゐる女をんなと相見つるかも

長崎にて暮らししひまに虫ばみし金槐集をあはれみにけり

さ庭べにトマトを植ゑて幽かすかなる花咲きたるをよろこぶ吾は

けふもまた何か気がかりになる事あり虫ばみし書ふみいぢり居れども

このごろ又外国ぐわいこくじん人を殺しし盗どろぼう人あり我わがこころ心あやしきを君

はとがむな

暈のしたにナフタリンなどふり撒まきて蚤おそれる吾をしぬばね

雑吟

東京アララギ歌会

心いらだたしく風吹きし日は過ぎてかへるで赤く萌えいでにけり

墓前

亀戸の普門院なる御墓みはかべに水青き溝いまだのこれり

山形より

月読つきよみの山はなつかし斑はだら雪照れる春日に解けがてなくに

五月九日

ふきいづる木々きぎの芽いまだ調ととのはぬみちのく山に水のみにけり

谿ふかくしろきはあづまやま吾妻山なみのゆきげ雪解のみづのたぎつなるらし

みちのくは春まだ寒しとほ遠じろくはざまをいづる川のさびしさ

ふるさと

かなしきいろのくれなゐ紅や春ふけておきなぐさ白頭翁さける野のべを来にけり

われひとりと思おもふ心に居りにけりをさなきかふこ蚕すでにねむりつ

五月十二日

結城哀草果を率て林間の野を行く

山がひに日に照らされし田の水やものの命いのちの幽かすかなりけり

みちのくのわが故里ふるさとに帰り来て白頭翁おきなぐさを掘る春の山べに

山陰やまかげのしづかなる野に二人ふたりみて細く萌えたる蕨をぞ摘つむ

みちのくの春の光はすがしくてこの山かげにみづの音おとする

山かげを吾等来こしかば浅あさみづ水ひるに蛭のおよぐこそ寂さびしかりけれ

木立こだちよりかこまれてゐる春の小野をの昆こんちゆう虫は跳ぬるだにこの平安やすらぎ
よ

六月十六日 女等の飼へる蚕

かりそめとおもふは寂さびし飼かひし蚕こは黄きいろき繭まゆにこもりはてたり

七月六日

胃腸病院に神保孝太郎博士を訪ひ、
ついで入澤達吉博
士の診察を受く

われひとり物おもふ室へやにきこえる鈍にぶくおもしろしちまたき衢のおとは
けふ一日ひとひたえまなく汗が流れしと記しるしおかむわが病やまひのことも

山水人間虫魚

一夜

甲斐^{かひ}がねを汽車は走れり時のまにしらじらと川原^{かはら}の見えし寂^{さび}しさ

しづかなる川原^{かはら}をもちてながれたる狭間^{はざま}の川^{かは}をたまゆらに見し

山がひにをりをりしろく激^{たぎ}ちつつ寂^{さび}しき川がながれけるかな

ふく風はすでにつめたし八ヶ嶽^{やっ たけ}のとほき裾野^{すその}に汽車かかりけり

天づたふ日のかたむける信濃路しなのちや山の高原たかはらに小鴉こがらす啼けり

高原たかはらに足をとどめてまもらむか飛驒ひだのさかひの雲ひそむ山

澄みはてているふかき空あひよに相寄れる富士見高原ふじみたかはらゆぐれにけり

あかときはいまだ暗きに目ざめゐる吾にひびきて啼く鳥のこゑ

蚊帳かやつりてひとりねむりしあかときの冷つめたきみづは齒かみに沁しみみにけり

みすずかる信濃高原たかはらの朝めざめくち口そそぐ水に落葉しづめり

林間

山ふかき林のなかのしづけさに鳥に追はれて落つる蟬あり

桔梗きちかうのむらさききちかうの色ふかくして富士見が原に吾は来にけり

松かぜのおともこそすれ松かぜは遠くかすかになりにけるかも

谷ぞこはひえびえとして木下^{こした}やみわが口笛^{くちぶえ}のこだまするなり

あまつ日は松の木原^{きはら}のひまもりてつひに寂^{さび}しき蘚苔^{こけ}を照せり

灯下（一）

ともし火のもとにさびしくわれ居りて腫^{むく}みたる足のばしけるかな

ひとを愛^{かな}しとおもふ心のきはまりて吾^{こと}に言^{こと}つげし友をぞおもふ

諏訪^{すは}のみづうみの泥^{どろ}ふかく住みしとふ蜷^{しじみ}を食^くひぬ友がなさけに

みすずかる信濃の国に足たゆく灯ともしびのもとに糠ぬかを煮にけり

高はらのしづかに暮るるよひごとにともしびに来てすが継る虫あり

灯下（二）

窓まどのと外は月のひかりに照されぬともし火を消しいざひとり寝む

しづかなる山の高原とおもへども電流に触れてひとは死にけり

月の光いまだてらさず白雲しらくもは谷べにふかく沈みたるらし

潮浴しほあみに安房あはの海べに行きたりしわがをさなごは眠りけむかも

夕飯ゆふいひをはやくしまひてこのよひは妻をおもへり何か知らねど

諏訪すはのうみの田螺たにしを食へばみちのくに稚をさなかりし日おもほゆるかも

よひとおもふにはや更けそめし山家やまがなるこのともしびに死ぬる虫
あり

うつしみは現うつしみ身ゆゑなげに嘆かむに山がはのおともあはれなるかも

文ほりもの身だらけの屍隅かばね田川に浮きしとふ記事きじも身に沁む山の夜ふけ
に

やまふかきその谷たにがは川に住むといふやまめ岩魚いはなを人はとり食はむ

八ヶ嶽の裾野のなびきはるかにて鴉かくろふ白樺の森

高原

蓼たてしな科はかなしき山とおもひつつ松まつはら原なかに入りて来にけり

いまだ鳴きがてぬこほろぎ土のへにいでて遊べり黒きこほろぎ

秋づくといまだいはぬに生あれいでて我が足もとに逃ぐるこほろぎ

秋らしき夜空よぞらとおもふ目のまへを光はなちて行く螢あり

谷川たにかはのほとりに見ゆるふる道はたえだえにして山に入るなり

月夜

高原たかはらの月のひかりは隈くまなくて落葉がくれの水のおとすも

ながらふる月のひかりに照らされしわが足もとの秋ぐさのはな

月あかし谷ぞこふかくこもり鳴る釜かまなし無川がはのおとのさびしさ

秋の夜のくまなき月に似たれどもこほろぎ鳴かぬ茅生ちふのつゆ原

飛驒ひだの空ゆふべに夕の光のこれるはあけぼのの如くしづかなるいろ

飛驒ひだの空そらにあまつ日おちて 夕映ゆふばえのしづかなるいろを月てらすな
 り

空すみて照りとほりたる月の夜に底ごもり鳴る山がはのおと

わがいのちをくやしむとは思はねど月の光は身にしみにけり

あたらぎの実

あたらぎのくれなるの実みを食はむときはちちはは恋こひし信濃路しなのぢにして

路^ちゆふぐれの日^ひに照^てらされし早^わ稲^せの香^かをなつかしみつつくだる山^{やま}
 山^{みやま}

八千ぐさは朝よひに咲きそめにけり桔梗の花われもかうのはな

やまめの子あはれみにつつゆふぐれて釜無川をわたりけるかな

山のべにほひし葛^{くず}の房^{ふさはな}花は藤なみよりもあはれなりけり

くだびれて吾^いの息^{いき}づく釜^{かま}無^{なし}の谷のくらがりに啼くほととぎす

釜無

夕まぐれ 南^{みなみだに} 谿^{たに} よりにごりくる谿^{たに}がはの香^かをなつかしみつも

小吟隨時

左千夫先生九回忌 七月十日於龜戸普門院

逝きましてはや 九^{このとせ}年^{とせ}になるといふ御寺^{みてら}の池に蓮咲かんとす

諏訪アララギ会 八月二十二日於上諏訪地藏寺

八千ぐさの朝あさな夕ゆふなに咲きにほふ富士見が原に吾は来にけり

諏訪アララギ会 九月三日於温泉寺

日の御みこ子むかふる足る日と信濃なる富士見の里にわれはめざめぬ

斎藤茂吉渡欧送別歌会 十月九日日限地蔵

わが心かたじけなさに充ちにけり雨さむきけふをあへる友はや

洋行漫吟

大正十年十月二十六日東京駅発、二十七日熱田丸横浜
出帆、諸先輩諸友の見送を忝うせり。二十八日神戸着、
上陸諸友に会ふ。京都に遊び藤岡旅館泊、中村憲吉君
宅一泊。六甲苦楽園六甲ホテル一泊。十一月一日神戸
出帆

十一月二日 門司著、上陸、巖流島、下関万歳楼、山陽ホ

テルに泊る

しづかにいにしへ人をしたふ心もて冬の港を渡りけるかな

(巖流島三首)

わが心いたく悲しみこの島に命いのちおとしし人をしぞおもふ

はるかなる旅路たびぢのひまのひと時をこの小島をしまにおりたちにつけり

十一月三日。午前十二時門司出帆、藤井公平、奈良秀

治、山口八九子三氏見送る。玄海浪高く、四十八分時
計をおくれしむ。大方の船客船に酔ふ。

十一月五日上海 福民病院長頓宮博士を訪ふ

海^{うみ}の面^{おも}しづかになれる朝あけて四^し十^{じふ}八^{はち}分^{ぶん}の時^{とき}おくれしむ

あかあかと濁^{にご}れる海と黯^{かぐろ}湛^{たん}くも澄^{すみ}みたる海と境^{さかひ}をぞする

戎^{じやんく}克^くの帆^ほ楮^{あか}き色^{いろ}してたかだか^{たかだか}とゆく揚^{やう}子^す江^{かう}の川^{かは}口^{ぐち}わたる

上^{しやんはい}海^{はい}のもろもろの様^{さま}相^さ人の世^よのなりのままなるものところそ思^{おも}へ

「日本首相原敬被刺」と報じたる上海^{しやんはいしんぶん}新聞^{しんぶん}の切^{きりぬき}抜^{ぬき}しまふ
 (六日)

十一月香港

清麗とも謂^いふべき小^{せうとし}都市^{とし}につらなりし山^いのかなたの支^{しなこく}那^な国^{こく}の見^みゆ

たちまちに 山^{さんじやう}上^うにのぼり見おろせる市街^{しがい}冬がれのさまにはあ
らず

no smoking に不^ぶ准^{じゆん}食^{しょく}煙^{えん}と注せりき「食^{しょく}煙^{えん}」の文字善しと
思はずや

茶^{ちやく}館^{わん}には「清^{せい}潤^{じゆん}甜^{てん}茶^{ちや}」の扁^{へん}がありにほへる処^{をとめ}女^を近^きづ^{きた}き来^{きた}
る

海^{かい}岸^{がん}はさびしき椰子^{やし}の林^{りん}より潮^{うしほ}のおとの合^あふがに聞^きこゆ

十一月十五日新嘉坡

空ひくく南みなみ十字星ふじせいを見るまでに吾等をりけるわたつみのうへ

日本にほん国の森に似しかなと近づくに椰子やしくろぐるとつづきて居たり

腰まきを腰に巻きつつとほるもの男をとこ女をみなとまだ雅をさなきと

汗じめるわが帳ちやうめん面の片隅かたすみにブルンボアンとしるしとどむる

ジヨホールの宮きゆうでん殿のまへに佇みしわれ等はらからとたり同胞十人あまりは

椰子やししげる中に群れゐし水牛すゐぎうがうごくとき人をおそれしめつつ

岬みさきなるタンジョンカトン訪ひしかばスラヤの落葉こほろぎ蟋蟀せせりのこゑ

太陽たいやうをマタハリといひて礼拝らいはいすまた「感天大帝かんでんたいてい」の文字もじ

牛車うしぐるまゆるく行きつつ南なる国のみどりに日は落ちむとす

「にほんじんはかの入口いりぐち」の標しるしあり遊子樹いうしじゆといふ樹さへ悲し

も

火葬場にマングローヴ樹じゆ植ゑたりき其処の灰を手にくくひても見

つ

二葉亭四迷も此処なに火葬せらる

日本にほんじん墓地ぼちの中にてはるかなる旅をし行かむこころな和なぎ居り

赤き道やし椰子しの林に入りシンガポールにけり新嘉坡ルのこほろぎのこゑ

はるばると船わたり来てかなしきはジャランプサルの夜よるのとよめ

き

十一月十八日マラツカ

マラツカの山やまもと本に霞たなびけりあたたかき国の霞かなしも

平たひらなる陸くがにかたまり青きをば柳やなぎの木きかとおもひつつ居る

東印度会社とういんどくわいしやのしるし今遺のこり過去くわこのほひを放ちてきたる

戦死者の記念塔きねんたふのまへにセナ樹じゆうゑ往くも還るも見む人のため

日本人にほんじんの歯科医にあひぬささやかに紙障子かみしやうじなどたてて居たり
き

今しがた牛鬪たたかひてその一つ角折れたるが途みちのうへに立つ

ふさふさにバナナ成り居るをまのあたり見てゐる吾等馴れむとす
らし

マラツカの街がいじやう上うにしてわれも見つ富める女をみなおもの面の愛はしきを

聖せいFrancis 《フランシス》 Xavier 《ザビエー》の墓時とときふりて此処ここ

にしづまる雪降らぬくに

マラツカをはなれ来りて入つ日の雲のながきにはほふ紅あけのいろ

額ひたひより汗いでながら支那人墓地馬来人墓地めぐりて来たり

十一月十九日ペナン

ややにしてペナンは近しそのはての空に白き雨ふるが見えつつ

その角つのを色うつくしく塗れる牛幾つも通るペナンに来れば

蛇おほく住める寺あり額がくの文字「恩沾無涯おんてんむがい」は国境くさかひせず

ペナン川に添さかひて遡かのほるところには水田すゐでんありて日本にほんしのばゆ

支那街しなまちはここにも伸びておのづから富よみたるものも代よをしかさね
つ

夜に入りて大おほあめ雨あめとなり乗りこめるデッキ航かう者しや (deckpassenger)
の床さへ濡ぬれぬ

十一月二十四日セイロン・コロンボ

水の中に水牛すゐぎゆうの群れゐるさまはなよなよとせるものにしあらず

おほどかに水張りて光てりかへし田植たうゑは今にはじまるらむか

この村に鍛冶かぢが鋼鉄かうてつを鍛へ居り鋤つちのひびきも日本にほんに似たり

Kandy 《キャンデー》にゆく途中にて土民等どみんが象に命令するこゑ
聞きつ

高々と聳えてゐたる山ひとつマハベリガンガと云ふにやあらむ

ことわりはおのづからにて錫蘭せいろんのサカブタの山に滝かかりけり

コロomboのちまたの上に童子等どうしが独楽こまをまはせり遊び樂しも

ここにしも植物園のもろ木々が油ぎりたる葉を誇らむか

仏牙寺ぶつがじにまうできたりて菩提樹ぼだいじゆの種子しゆし日本にも渡れるをおもふ

おほきなる白き獸けだものちひさなる獸けだものを食ふところを彫りぬ

椰子の葉をかざしつつ来る男子をのこらの黄なるころもは皆ぶつし仏子にて

つづき居る椰子やしの木立こだちのひまもりて入日いりひの雲のくれなる見えつ

冬さむき国いでて遠くわたりけりセイロンの島に螢を見れば

十一月二十六日印度洋

余よくわう光さへなくなりゆきし渡津海わたつみにミニコイ嶋の灯台の見ゆ

あらはれし二つの虹にじのにほへるにひとつはおぼろひとつ清さやけく

印度いんどの洋うみけふもわたりて 食しょくたく卓たくに薯蕷とろろ汁の飯いひを人々たのしむ

わたつみの空そらはとほけどかたまれる雲くもの中なかより雷らい鳴りきこゆ

虹ふたつ空そらにたちけるそのひとつ直すぐ眼めのまへにあるにあらずや

十二月一日アデン湾、三日紅海

アデン湾アデン湾にのぞむ山々ひら展ひらくれど青きいろ見ゆる山一つなし

佐渡丸さどまるととほり過がへり海わたる汽笛きてきかたみに高きひととき

朝あけて遠く目に入る鋭とき山やまをアフリカなりといふ声ぞする

空のはてながき余よくわう光をたもちつつ今日けふよりは日がアフリカに落
つ

夜よる八時バベルマンデブの海峡かいけふを過ぎにけるかも星かがやきて

ペリム島たうア亜刺比亚ラビアの国に近くしてその灯台の見えはじめたり

アフリカに日の入るときに前山さきやまは黒くなりつつ雲の中の日

あかつきは海のおもてに棚たなびける黄色くわうしよくの靄もやあな美うつくしも

紅海こうかいに入りたる船はのぼる陽ひを右にふりさけ見れども飽かず

甚だしく紅あかかりし雲あせゆきて黙示もくしのごとき三つ星の見ゆ

紅海こうかいの船の上より見えてあるカソリン山さんは寂さびしかりけり

海風うみかぜは北より吹きてはや寒しシナイの山に陽ひは照りながら

十二月七日エヂプト

Suez よこ [Geneve] , Fayed, Nefisha, Esmailia, Abou-hamm
ad, Zagazig, Benha 等の駅を経て Cairo 著。ピラミッド、ス
フィンクス等よりカイロ市街を觀、Port Said に至る。同行
神尾、薬師寺、庄司三氏のみ

大きなる砂漠のうへに軍隊ぐんたいのテントならびて飛行機飛べり

丘きゅうりよう 陵のうへに白雲の棚びけるところもありぬすずしくなりて

砂原すなはらのうへに白々と穂ほにづるはしろがね薄すすきといふにし似たり

列れつなしてゆく駱駝らくだ等のおこなひをエジプトに来て見らくし好しも

Bitterlake 《ビタレーキ》といふ湖みづうみ水が見ゆ小鴉こがらすのむれ飛び
をるは何するらむか

土の家部落をなして女など折々いでて此方見にけり

英吉利の兵營なるかかたはらに軍馬の調練せるところあり

モハメツドの僧侶ひとりが路上にてただに太陽の礼拝をする

たかり来る蠅あやしまむ暇なく小さき町に汽車を乗換ふ

白き鷺畑のなかに降りて居り玉蜀黍の列ながくつづく見ゆ

しづかなる午後の砂漠にたち見えし三角の塔あはれ色なし

ピラミッドの内部ないぶに入りて 外ぐわいくわう光くわうをのぞきて見たりかはるがは
るに

スフィンクスは大きおほかりけり古ふるき民たみこれを造つくりて心なごみきや

はるばると砂に照りくる陽ひに焼けてニルの大おほ河かはけふぞわたれる

はるかなる国にしありき埃エチプト及エチプトのニルの河べに立てるけふかも

ニル河はおほどかにして濁りたり大いなる河いつか忘れむ

朝床に聞こえつつゐる馬うまの鈴すずわれの心をよみがへらしむ

黒々としたるモツカを飲みにけり明日よりは寒き海をわたらむ

十二月九日地中海

このタベ鯛たひの刺身さしみとナイル河がの鰻食うなぎはしむ日本にほんの船ふねは

シシリーのイトナイの山はあまつ日にかがよふまでに雪ふりにけり

伊イ太タ利リ亜アの Reggio 《レツジヨ》の町を見つつ過ぐしらじらとせ
 る川かはら原はらもありて

Messina 《メツシナ》の海かい峡けふわたり冬枯ふゆかのさびたる山が目にし
 入いり来くも

孤こ独どくなるストロンボリーのいただきに煙けむりたつ見ゆ親したしくもあるか

Balk 《バルク》といふ三み檣はしら船せんも見えそめてコルシカ島たうに近づ
 きゆかむ

十二月十四日マルセーユ

朝さむきマルセーユにて白き霜^{ブリキ}力のうへに見えつつあはれ
 山のうへのみ寺に來り見さくるや勝^{かちどき}鬨あぐる時にし似たり

十二月十五日巴里

十二月十五日午後十時十分巴里ガル・ド・リオン著。
 オテル・アンテルナシヨナル投宿。銀行、大使館、

市街、トロカデロ、エツフェル塔、エトワール、ルウ
ヴル、パンテオン、アンヴァリード、リユクサンブ
ル、クルニエ博物館、オペラ、地下鉄道（メトロ）等。
十八日まで滞在す

霧くらく罩こめて晴れざる巴里パリにて豊ゆたかなるものを日々ひびに求めき

ルウヴルの中にはひりて魂たましひもいたきばかりに去りあへぬかも

英雄えいゆうはその光ひかりをも永久とほにして放たむものぞ疑ふなゆめ

[Ici repose un soldat français mort pour la patrie] 1914-1918むねも

ぬかづく

十二月二十日伯林

十二月十九日、午前八時十分、ガル・ド・ノールを出
発して伯林に向ふ。小池・神尾二君と予と同車なり。

十二月二十日伯林アンハルターバンホーフ著。石原房
雄君出迎ふ。Hotel Alemannia 投宿。

○爾来前田茂三郎君はじめ多くの同胞に会ふ。○十二月二十七日、ハンブルグに行き老川茂信氏に会ふ。帰途の汽車中にて信用状の盗難に遭ひ困難したるが、信用状大使館に届き、謝礼三五〇〇麻克にて結末を告ぐ。○三十一日、ユニオン・バレエにて除夜を過ごし、十二時に大正十一年の新年を祝ふ。○四日より連日美術館を見る。○八日、神尾君ウユルツブルヒに立つ。○十三日、奥太利、維也納に向ふ。

大きなる都とくわい会いのなかにたどりつきわれ平へい凡ぼんに盗たうなん難なんにあふ

美術館ムゼウムに入りて佇む時にのみおのれひとり一人の心こころとなりつ

おどおどとベルリン伯林なかの中に居りし日の安やすらぎてウイッナ維也納ナに旅立たむと
す

「つゆじも」後記



歌集「つゆじも」は制作年代よりいへば、自分の第三歌集に当り、歌集「あらたま」に次ぐものである。そして、大正六年十二月、自分が長崎医学専門学校教授になつて赴任した時から、大正十年三月長崎を去るまでのあひだに、折に触れて作つた歌、それから、東京に帰つて来て、その年の十月すゑ、欧羅巴留学の途に上るまでのあひだに作つた歌（その中には信濃富士見で静養した時の歌をも含んでゐる）、それから、船に乗つてマルセーユまで

行き、汽車で巴里を経て伯林に著き、暫時其処に滞在し、大正十一年一月十三日、維也納に向つた時までの歌をひろひ集めたことになつて居る。



自分の長崎時代の歌、即ち大体大正七年八年九年の歌は、アララギ、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、長崎日日新聞、雑誌紅毛船雑誌アコウ等にたまたま載つたもの以外は、未定稿のものをも交へて手帳に控へ、一部は歌稿として整理してあつたものが、大正十三年の火難に際して焼失してしまつた。そこでもはや奈何とも為ることが出来ないから、既に発表したもののみにとどめて編輯しようとおもひ、大正十五年ごろその一部を印刷にまで附したの

であつた。然るに計らずも、欧羅巴から持歸つた荷物の中に、長崎時代の小帳面四冊あることを発見したが、その中には大正九年病のため静養してゐた頃の歌がいろいろ書いてあつた。即ち、自分が大正十年の夏ごろ解放といふ雑誌に発表した「温泉嶽」と題した十数首の歌は、皆この小帳面の中にあることを発見したのである。さうして見ると、是等の小帳面は自分が洋行するとき、荷物の中にほかの物と一しよに入れたのであつた。帳面には、長崎から鹿児島宮崎の方に旅したときの未定稿のもの、それから長崎を去つて上京するまでの途中の歌をも若干首書き記してある。是等は皆粗末な歌であるが、自分としては記念したいものであつた。ただ大正七年八年ごろの小帳面が失せたからその年に作つた歌が

無い。大正七年夏には、二三の同僚と共に宇佐から耶馬溪、それから山越をして日田に出て、日田から舟で筑後川をくだり、鮎の大きいのを食ひ、その耶馬溪から日田への途上、夜の山越をしたとき、紅い山火事を見たりして、その時の歌もあつたのに、それ等は焼失せたのであつた。また大正八年には同僚知人と共に熊本に遊びそれから阿蘇山にのぼり、別府へ抜ける旅をし、阿蘇の腹で撮つた写真も遺つて居るし、その時の歌も若干首あつた筈だが、それ等は焼けたから奈何ともすることが出来ない。

○

焼失せた其等の歌のごときは、所詮粗末なものであるから、大観すれば決して惜しむには足らぬけれども、焼失して見れば、つ

まらぬものにも愛惜をおぼゆるは人の常情であらうから、この歌集には随分つまらぬ歌まで収録せられたのである。また洋行の歌であるが、洋行は自分のはじめての経験であり、慌しい作のうちから、辛うじてこれだけ整理したのであつた。海上の赤い雲の歌などが幾首も出て来るが、これも初航海の経験者として免れがたいことであつた。

○

私が帰朝して、火事のために、雑誌書籍を焼失してしまつたとき、同情深き諸友は、私のために、所蔵の新聞雑誌の切抜を贈られたのであつた。その諸友は、渡辺庫輔（与茂平）、村田利明、鵜木保、鹿児島寿蔵、竹内治三郎、森路平（高谷寛）、赤星信

一、村田敏夫、山根浩、加納美代、佐藤峰人、遠藤勝、畠山元三郎、結城健三、三田滯人、志村沿之助、我謝秀昌の諸氏で、この集を編むことの出来たのも、皆此諸氏のたまものである。特に、私ごとき者の書いたものを、斯く丁寧^ニに保存して置かれたといふことに対し、私は涙の出るほどふかく感動したのであつた。この感動と感謝とは、既に十数年を経過した今日といへども毫も變るところがない。

○

集の名「つゆじも」といふのは、この一卷の内容が主として長崎晩期の心にかよふと思ひ、かく命名したのであつた。併し、万葉に、ツユジモノケヌルガゴトク露霜乃消去之如久。ツユジモノスギマシニケレ露霜之過麻之爾家礼などの如く、無常

悲哀を暗指するやうだから、歌集の名としてはどうかしらんと云つて呉れた友もゐたが、『露霜乃、消安我身、雖老、又ツユシモノ ケヤスキワガミ オイヌトモマタヲチカヘリ、君乎思將待』キミヲシマタム（万葉卷十二）といふ歌もあるから、大体この名にしておかうと答へたのであつた。また私のこの集を予告したのと前後して、某氏の遺稿に、「つゆじも」といふのが出でて、かたがた自分もどうしようかとおもつたのであるが、やはり最初の心にこだはつてこの名を存することとしたのである。



この歌集は昭和十五年の夏に編輯した。自分の歌集は「寒雲」以来新しい方から逆に発行しようとして企てたから、本集の発行はいつになるか明瞭ではないが、兎も角、ほかの歌集を整理したついで

でに整理して置くのである。(以上昭和十五年八月記)

○

昭和十八年夏、横浜の佐伯藤之助氏が、私が大正七年八月七日長崎で書いた左の短冊を示された。

長崎に来てより百日過ぎゆきてあはれと思ふからたちの花

○

ついで昭和十八年十二月六日、長崎の森路 平氏が左のごとくに通信せられた。

大正十年一月二十三日、長崎市酒屋町松樂にて斎藤先生送別小宴を催す。会するもの、斎藤茂吉、広田寒山

の両先生、大久保日吐男（仁男）、前田毅、大塚九二
生並に高谷寛（森路 平）、斎藤先生に左の即吟あり

うつしみは悲しけれどもおのづから行かなかたみにおもひい
でつつ

この家に酒に乱れゑひて人は居りとも我等の心にさやらぬし
づけさ

をみな等のさやぎのひまに聞ゆるはあられ降りつつあはれな
る音

女等のさやぎのひまに聞ゆるは霰のたまるさ夜の音かな
寺まちの南のやまの黒々とつひに更けつつあられ降る音

○ 昭和二十年九月、山形県金瓶在住中、熱海磯八荘なる永見徳太郎（夏汀）氏より来書、米軍の用ゐた原子爆弾の惨害を報ずると共に、大正九年予がのこした次の三首を報じた。

長崎の永見夏汀が愛で持ちし鰐わにの卵をわれは忘れず

南京なんきんの羹あつものを我に食はしめし夏汀が孀つまは美しきかな

しづかなる夏汀が家のこの部屋に我しばしばこ来し 百穂ひやくすゐも
来し

○

大正七年は自分の三十七歳の年に当るから、本集の歌は殆どすべて三十七歳から四十歳に至るあひだに作つたものといふことに

なる。また、本集の歌数は、本文中に六百九十七首、後記中に九首あるから、合算すれば七百六首といふことになる。（以上昭和二十年九月記）

○

本歌集の発行は岩波茂雄、布川角左衛門、佐藤佐太郎、中山武雄、榎本順行諸氏の厚き御世話になりました。私は三月から病気になるに今なほ臥床中でありますが、その間岩波茂雄氏の急逝にあひ、悲歎限りありません。（昭和二十一年五月廿九日、大石田にて、斎藤茂吉記。）

青空文庫情報

底本：「歌集 つゆじも」短歌新聞社文庫、短歌新聞社

2004（平成16）年7月6日初版発行

2007（平成19）年9月10日再版発行

底本の親本：「歌集 つゆじも」岩波書店

1946（昭和21）年8月30日

※「寛済」と「寛濟」、「ピナテル」と「ピナテール」の混在は、
底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、「齋藤茂吉全集 第一巻」岩波書店の表
記にそって、あらためました。

※片仮名の拗音、促音の大書きと小書きの混在は、底本通りです。

入力：光森裕樹

校正：のぶい

2018年2月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つゆじも

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>